名稱

ゑら河のせきにちりしく花みれば苔のむしろはうづもれにけり

〔徒然草上〕御室にいみじき兒の有けるを、いかでさそひ出してあそばんと、たくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破子やうのもの念比にいとなみ出て、箱風情の物にゑたゝめいれて、ならびの岡の便よき所にうづみをきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ參りて兒をそゝのかし出にけり、うれしとおもひてこゝかしこあそびめぐりて、有つる苔のむしろになみゐて、○略下

〔倭名類聚抄十四坐臥具〕薦　唐韻云、薦作甸反、和名古毛、席也、

〔箋注倭名類聚抄六坐臥具〕廣韻、薦、薦席也、按薦席也、猶言薦席之薦、非以薦席訓薦字、此脫薦字、非是、按釋名、薦、所以自薦藉也、說文、薦、獸之所食艸、卽莊子麋鹿食薦字、釋文引三蒼注云、六畜所食曰薦是也、則非此義、說文又有荐字云、艸席也、然則薦席之薦、作荐爲正、作薦者音近而假耳、毛詩節南山傳、薦重也、說文、且、薦也、亦皆荐之假借字、

〔伊呂波字類抄雜物〕薦　薦席也

〔運步色葉集古家飾具〕薦　同菰　音箭　和名古毛○略中

按薦編藁秸作之、織藁及莞作筵、片目也　織莞作席、雙目

〔倭訓栞前編古九〕こも　和名抄に薦をよめり、小編の義にや、延喜式に長薦、葉薦、折薦、茅簀薦、江次第に羽薦、食薦、簀薦など見えたり、鎭江府志に黍蓬者野莢也、不結實惟堪薦藉、故曰薦と見ゆ、菰をよむも薦に用ればなり、蔣も同じ、韓子に蔣席と見ゆ、

〔安齋隨筆前編十二〕一薦席　マコモと云草を編て席にしたる也、禁中神事に用之事あり、食盤の下に敷くを食薦と云、今江戸にて七月十三日より十五日まで聖靈會ノ時、聖靈棚に薦を敷は、食